

あとがき

本来ならば、本報告書は研究代表者である松井章先生が、本研究課題を終える3年後にまとめられる予定であった。しかし、志半ばの2015（平成27）年6月9日に残念ながらご逝去された。報告書の刊行については、松井先生の編集作業を菊地が引き継いだ。

本研究課題の出発点は、2005年末に田螺山遺跡の発掘調査現場を見学し、2006年度より金沢大学の中村慎一教授の科学研究費研究にて、本格的に田螺山遺跡出土動物骨の調査を始められたことが契機となっていると記憶している。その頃、動物考古学が飛躍的に進展し、東アジアはイヌ、ブタ、ニワトリの家畜・家禽化の起源地として、世界的に注目を受けていた。松井先生は、中国の長江下流域は水稻稲作の起源地である可能性が高いことから、初期農耕に関連する新石器時代遺跡から出土した大量の動物骨の研究から、家畜・家禽の起源地とその伝播、発展を解明するうえで極めて重要な地域であると認識されていた。第1部の「家畜（禽）起源考古学日中合作研究」は、このような観点に基づいた研究である。そのなかで松井先生は、初歩的な分析ながらも、新石器時代の飼養環境はいまだ野生状態に近い環境にあり、現代でもイノシシとブタは容易に交配して雑種が生まれることから、野生であるイノシシと家畜ブタの混血が日常的に進んでいたと推察している。そして、こうした環境下における混沌とした形質は、歯の計測、咬耗の進行などといった従来の比較形態学的研究による細分化では、解釈に限界があり、同位体分析やDNA分析の成果を応用しながら、新たな家畜化の指標を定める必要性を説いている。こうした指標の確立は、今後我々に課された課題であろう。

第2部の人骨骨格図譜の改訂版は、家畜・家禽の形態的変異を数値化するために松井先生と進めていた、現生骨格標本の三次元計測に端を発する。すでに『動物考古学の手引き』（奈良文化財研究所）や『動物考古学』（京都大学学術出版会）で骨格図譜は公開されていたが、三次元計測で精緻な表現が可能となったことから、まずは、考古学で最も需要の高い人骨骨格図譜の改訂版を出すことにした。しかし、奈良文化財研究所で所蔵している人骨骨格標本は、男女が揃っていないため、京都大学大学院理学研究科の中務真人教授にご相談し、標本をお借りすることにした。標本の選定は、茂原信生先生にご協力いただいた。改訂版の構成については、闘病中の松井先生、中橋孝博先生と共に協議し、三次元計測を平澤麻衣子さんにお願いした。また、三次元計測でも表現しきれない点は、写真で補うこととした。写真は中橋先生の調査経験が活かされており、実践的な骨格図譜を目指した。

本書を刊行するにあたり、日中共同研究の成果報告では、データの公表を許可してくださった劉斌所長、「家畜（禽）起源考古学日中合作研究」を快諾してくださった李小寧前所長をはじめ、長年、松井先生の実地調査をサポートしてくださった鄭雲飛先生、孫国平先生、王寧遠先生や浙江省文物考古研究所の方々に感謝申し上げます。また、奈良文化財研究所の松村恵司所長、難波洋三埋蔵文化財センター長や奈良文化財研究所の方々には、多大なご支援を賜った。末筆ながら御礼申し上げます。

最後まで快復を信じ続け闘病されるなか、病床でもう一度叶えたかった中国調査への想いや、今後の研究構想を話されていたが、言葉の端々に無念さがにじみ出ていたことを思い出す。本書を松井先生にお見せできなかったことが悔やまれる。託された課題を解決し、新たな分野を切り拓いていくことこそが、先生の学恩に報いる一番の道にほかならない。

菊地 大樹

2016年3月于京都